

文化財
NEWS速報

発見!

土の中の古墳時代

—町屋四丁目実揚遺跡—



発掘調査風景



木製の井戸と土師器



調査地全景（北側からのぞむ）

荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録 (17)0029-1号

遺跡の場所はどこ？ 今回発見された「町屋四丁目実揚遺跡」は、1キロほど北上すると隅田川が流れ、南に下れば東西に都電が走る住宅街の中にひつそりと眠っています。

地形を見ると、低地より微妙に高い土地」「微高地」の縁にあたり、中世の頃よりムラがあつたことで知られるところです。周辺を見渡すと、上流の隅田川右岸の自然堤防に、北区志茂遺跡、同豊島馬場遺跡など、古墳時代の遺跡がいくつかあります。これまで区内では、自然堤防をはじめ微高地に大きな遺跡は見つかってませんでした。

本発掘調査、お宝は？ さて、この遺跡は「周知の埋蔵文化財の包蔵地」であつたために、開発前の事前調査が必要でした。始めはいつものような試掘風景でしたが、掘り進めるうちに、たくさんの土器片が発見され、遺構も確認できましたので、本発掘調査を行うことになりました。調査は、5～6月にかけて行われ、その結果、古墳時代前半（紀元3～4世紀）を中心とした遺跡であることがわかりました。出てきたものは、溝状の遺構、井戸、土師器などです。中でも珍しいものが木製の井戸です。井戸の木枠は、別の目的で作られたものを転用したものでは

ないかと推定されています。また、井戸の中からは土師器が数点見つかり、井戸に関する何らかの儀式に使われたと考えられています。溝状の遺構は、諸説ありますが、近年の調査研究の結果、隅田川流域（旧荒川下流域）—低地や微高地など低い土地にあつた住居もしくは建物説が有力です。

但し、当時、川の流路がどのようになっていたのか、古環境・古地形の謎も残っています。今後の周辺調査が行われることで徐々に解明されることと思います。

遺跡の調査って大変！ 遺跡の発見は、当時の環境や当時の人びとの暮らしぶりがわかる貴重な情報と資料を私たちに与えてくれます。しかしながら、「歴史のロマンを感じる」とばかり言つてはいられません。遺跡の多くは、現在、私たちが日々暮らしている土の下に眠っています。遺跡を調べるためにには、膨大な時間と費用がかかり、その土地の所有者や建て主の方々などの多大なる協力が得られて初めて行えるのです。

現在、「町屋四丁目実揚遺跡」は、整理調査中で、来年、報告書が刊行される予定です。また文化館での公開も計画していきたいと思いつますので、お楽しみに！

（八代和香子）

山車人形の縁結び

過ぎゆく季節へのたより①

祭りとともにやつてきた。初秋を告げる、諏方神社の祭りがやつてきました。鎮座800年の大祭を迎えたこの日、豊島左衛門尉経泰、関羽、加藤清正(頭部)の山車人形も、神社社殿にやつてきていた。久方ぶりに、揃つて日暮里・谷中の人たちの前にお目見えしたのである。

山車人形	町
加藤清正人形	善光寺坂町(現谷中一丁目辺)
五虎將軍関羽	八軒町(七軒町カ。現池之端二丁目辺)
熊坂長範	上三崎町(現谷中二~五丁目辺カ)
鞍馬山僧正坊	下三崎町(現谷中二~五丁目辺カ)
戸隠明神天の岩戸	新古門前町(現谷中五、六丁目辺カ)
龍神千珠	茶屋町(現谷中六、七丁目辺)
神宮皇后	中門前町(現谷中七丁目辺)
信玄川中嶋	七面前町(現谷中五丁目辺)
鎮西八郎為朝	日暮里(現西日暮里一、三~六、千駄木三丁目辺)

*『藤岡屋日記』4(三一書房)より作成。

諏方神社の山車人形 同社の山車
人形が初登場したのは恐らく19世紀初頭と推測されるが、具体的には『藤岡屋日記』4(三一書房)より作成。

山車の行方 明治の世も山車の巡行は続き、同41~43年に確認できる。が、その後、数年を経ずして曳かれなくなつた。豊島左衛門尉は、明治19年(一八八六)作で、神社を勧請したとされる縁起上の人物をモデルとする記念碑的な山車人形だが、大正8年(一九一九)に谷中上三崎町と同初音町一丁目(現谷中七丁目)から埼玉県越生町上町に譲られた(現役で活躍中)。為朝は昭和11年段階には神楽殿にあり(『荒川區史』)、関羽は、昭和29年に早稲田大学演劇博物館に寄贈された(『演劇博物館五十年』)。といつても、それぞれの行き先で、大切に守られた。これがとりわけ重要で、そのおかげでこの4体が今まで残った。

里帰りから交流へ さて人形たち



豊島左衛門尉経泰の山車人形
(越生町上町蔵) *新澤氏撮影

帰り支度をする豊島左衛門尉を見て、来年も越生で再会したいとの声が上がつたという(HP「やなか発」)。全てが終つて残つたのは、諏方神社氏子町々と越生町上町との間に生まれた新しい交流だ。山車人形がこのようないい関係を取り持つ「縁結び」の役割を果たそうとは、当の豊島左衛門尉も思いもよらなかつたに違いない。

〈亀川泰照〉



関羽の山車人形
(早稲田大学演劇博物館蔵)

江戸時代、町屋村から三河島村(現荒川)を通り、江戸へ向かう道(「江戸道」)があつた。今回は、江戸道を通つて町屋村から三河島村へ向かうコースを紹介しよう。

お薦めは、辻や寺社の境内に残る庚申塔。3年間、庚申待を続けたことを記念して建てられたものである。庚申待とは、60日ごとにめぐつてくる庚申の日、人間の体内に住んでいる三戸の虫が寝ている間、天帝に悪事を告げてその人の寿命を縮めてしまう、それを防ぐためその日は寝ずに夜を明かす行事のことを行う。つまり、庚申塔は昔の人がとが庚申の日に集まり宴を催して夜を明かした痕跡なのだ。庚申塔には、本尊である青面金剛や、三猿、鶏が刻まれることが多い。区内には、そんな江戸時代の庚申塔が約40基現存する。



三峯神社の庚申塔
むかって左が、慶安5年銘の庚申塔。

史跡めぐりコース②町屋・旧三河島編

文化館おすすめ

『荒川ふるさと文化館だより』第15号の正誤表

頁	場所	正	誤
2	表「嘉永3年の諏方神社の山車人形」の下から3行目	神功皇后	神宮皇后

企画展こぼれ話

(3)

「プラモモデルとあらかわ」

「ベンケイガニ」を追って

小松崎茂の箱絵

荒川ふるさと文化館では、この

9月25日まで企画展「下町の空想

画家 小松崎茂展」を開催した。

小松崎茂は荒川区南千住出身で、

戦後の絵物語から雑誌の口絵など、昭和

の少年文化をリードしてきた画家

である。

「ベンケイガニ」のプラモデル

小松崎が手がけた数ある箱絵のなかで異彩を放つているのが「ベンケイガニ」だ(写真)。川の河

なかでもプラモデルの箱絵にかけては、サンダーバードをはじめ軍艦・戦車など、この世界の第一人者であった。

『ベンケイガニ』のプラモデル



ベンケイガニ(エーダイ)

箱絵/小松崎茂

小松崎の描く「ベンケイガニ」は、緻密な描写とリアルな色彩で、まるで図鑑の絵のようだ。

(根本圭助氏蔵)

口近くの葦原や土手に棲む小さなカニである。この他、水の生物シリーズとして「ハマガニ」、昆虫シリーズとして「アブラゼミ」インアップされており、それらの箱絵もすべて小松崎が描いている。いずれもゼンマイで本物そつくりに歩くのがウリであった。キットの出来とともに箱絵の良し悪しが売上げに影響する。このシリーズの箱絵を当時一番人気の小松崎に依頼したことからメーカーの意気込みがうかがい知れる。

このキットを発売したのは、区内東尾久二丁目にあつたプラモデルメーカーのエーダイである。区内にはもともと玩具製造の町工場が多かつたが、昭和30年代に国産プラモデルが登場するとプラモデルを製造する工場が現れる。エーダイも木製玩具から模型飛行機、そしてプラモデルと転向している(『荒川区商工名鑑』)。

残念ながらベンケイガニがいつ頃発売されたのかなど、詳しいことは調べられてないが、昭和47年にバンダイで昆虫のプラモデルを発売しているので(この箱絵も小松崎)、同じ頃かもしれない。バンダイの昆虫もゼンマイで動く仕組みになつておらず、當時の船や戦車のプラモデルにもモーターが付いていたように、プラモデルは動

くおもちゃであるという認識が強かつたようだ。その後外観のリアルさが重視されて、ディスプレイ用として多く発売されているミニチュアモデルもこの系譜を引いているのである。それについて子どもよりも大人が喜びそうな商品に変化したようである。

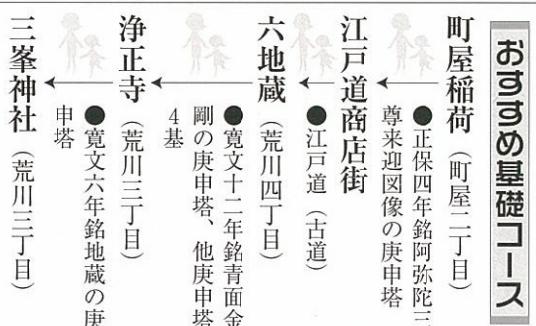
「ベンケイガニ」に思うこと

ベンケイガニをはじめ、生き物がプラモデルになった理由はなんだろうか? 子どもたちが生き物好きなのは今も昔も変わらない。

区内でもかつて町屋あたりの隅田川岸にはベンケイガニがいたといい、小松崎は幼少の頃汐入(現南北千住八丁目)によくカニ取りにいったという。しかし、ベンケイガニが発売された頃の昭和40年代は全国的に公害が社会問題となり、川から様々な生き物の姿が消え、子どもたちがそれに接する機会はほとんどなくなっていた。

そんな時代の、特に自然との関わりを持てなくなつた町の子どもたちの目に、ゼンマイ仕掛けのカニのプラモデルは興味深く映つたのではないか。それは自然との一種のバーチャル体験といえるかもしれない。そして小松崎の精密な箱絵が子どもたちの想像力をさらばに膨らませたことは疑いない。

(弥永浩二)



※寺社の境内に入る際には、事前にご連絡の上、所有者あるいは管理者の指示に従ってください。

※一般参拝の方もいます。周りの人に迷惑がかからないように静に鑑賞しましょう。

見所は、区内で2番目に古い造立年銘をもつ町屋稲荷の庚申塔と、江戸において青面金剛名初見とされる三峯神社のものだろう。町屋稲荷の庚申塔は正保4年(一六四七)の造立銘をもち、全国的に珍しい阿弥陀三尊来迎図像が刻まれている。また、23区内の庚申塔で女性が参加している古い例もある。三峯神社のものは、庚申塔の本尊、青面金剛名の江戸における初見の例である。

意外と身近に残る庚申塔。何時、誰によつて造られ、どんな絵や文字が刻まれているのかよく見て欲しい。そうすれば、江戸時代に生きた人びとの祈りの声が聞こえてくるかもしれない。(加藤陽子)

専門員は見た! マネキ発見!

⑥

区内にも立派な富士山があると

いつたら皆さんは信じるだろうか。

それは日暮里三丁目の富士見坂

から見える富士山のことではな

い。実は、南千住に富士山が二つ

も存在するのだ。一つは、隅田川

沿いの石浜神社（南千住三丁目）、

もう一つは素盞雄神社（南千住六

丁目）にある。もちろんこの二つ

は三千m級の山ではない。本家富

士山から祭神の木花開耶姫命を勧

請して、浅間神社として祀られた、

境内の一角に納まるくらいの「富

士塚」と呼ばれるミニ富士なのだ。

東京の富士講の人たちは、山開き

の時（旧暦5月晦日・6月1日）に7ヶ所の富士塚を参拝する「七富士巡り」を行つた。二つの富士山も、そのルートに挙げられていました。さて、とある日、筆者も、のつぴきならない事情から、山開き間近な二つのミニ富士山を人々に巡ることになった。

石浜神社の富士山 現在の富士山は再開発事業によつて昭和63年に築造し直したもので、漸くそのお姿に慣れてきたところだ。明治2年（一八六九）の明細に「文明八

素盞雄神社の富士山 素盞雄神社

申歳六月鎮座」とあり、凡そ530年も前に既に浅間神社を勧請したとされる（文化館*ブックスあらかわ神社明細）。

『江戸名所図会』の境内図を見ると、江戸時代の富士塚は東を向いて築かれていたようだ。つまりその背の遙か西方には本物の富士山が存在する。当時は、靈峰富士を仰ぎ見る格好のスポットだったようで、宝暦8年（一七五八）銘の「富士遙拝所碑」がある。同碑の側面の「皇の神忠御告や三国を」の記述が残っている（『石浜神社誌』）。さて、遙拝するといつてもどんな眺めだったのだろうか。文政7年（一八一四）、書家で名高い亀田鵬斎が橋場の渡し辺の歴史や風景を漢詩にして石碑（区指定文化財）に刻んでいる。文中に「北嶺青螺西嶽雪、雙峯並落水中天」とあって、西・北に聳えれる代表的な二つの靈山、富士山（西嶺）・筑波山（青螺）の山影が隅田川に落ちるかと見まごうばかりの景色であると、筑波山と富士山とを並べての眺めの素晴らしさを絶賛している。現在もビルの上に登れば筑波山が見えるが、富士山まで見通せるのだろうか。一度確かめてみたいものだ。

飛び込んできた。遂に富士講のマネキとの対面



下谷講社のマネキ
(通新町睦蔵)

用具に感嘆している中、マネキの収納箱が出現。大きな箱の蓋を開けると、目に深紅のマネキが飛び込んできた。遂に富

陸の一人が富士塚の方に誘つた。富士塚上の奉納碑に先祖の名があるというのだ。塚の北側に向かうと、明治32年6月に「通新講社中」が奉納した碑があり、先の墨書に一致する講員を含めて28人の名前を確認することができた。

通新町の富士講についての調査は端緒に着いたばかりである。しかし、富士講に関する資料調査を陸の皆さんと行えたことは無上の喜びであった。何しろ、企画展でご披露させて頂くことの確約が得られたのだから。



下谷講社の碑(素盞雄神社)

である。箱や裏面の墨書き

4月に、比留

間藤吉・田中

大五郎・中田

倉吉・関口傳吉・小林吉兵衛・小

沼傳右衛門ら15人の講員によつて作られたものだとわかった。4m弱の赤いラシャ地に金糸の刺繡を施した見事なマネキ。それに富士山のお使いの赤い猿さんも一対入っていた。